

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13313

研究課題名(和文) 有料化する聖地：宗教空間の経済的ゾーニングと公共的管理に関する観光学的研究

研究課題名(英文) Fee-charging sacred places: A study on the economic zoning and public management of religious spaces

研究代表者

門田 岳久(KADOTA, Takehisa)

立教大学・観光学部・准教授

研究者番号：90633529

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：聖地など日常における宗教実践で形成されてきた空間の観光地化に伴い、入域料を徴収したり、ゾーニングを行ったりする手法で、空間管理が増加している。本研究は宗教空間の管理が既存の儀礼や信仰、民俗に与える影響を精査した。沖縄・長崎・新潟における事例を比較検討する中で、経済的な空間管理の導入は「世俗的」な管理組織の組織化を促し、過疎化により衰退する共同体に代わって聖地や宗教実践を担う主体になりつつあることが見て取れた。こうした世俗と宗教の交錯した新たな管理組織の体制は、精神性や宗教性を求める現代の観光客のニーズと重なり合うことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

観光学においては従来、巡礼や聖地の研究に大きな関心が払われながらも、宗教研究の知見を踏まえた理論化が十分になされていたとは言いがたく、宗教的事象への表層的な理解に基づく理論書や概論書が大勢を占めていた。こうした現状に対し、宗教的事象の内在的理解を踏まえ、宗教研究の視点と観光研究の蓄積とを融合した本研究課題の成果は、今後宗教的空間や村落空間に学術的関心を更に拡大させることが予想される観光学において、基礎研究としての知見を提供するものになったと言える。

研究成果の概要(英文)：Religious spaces formed in indigenous religious traditions have attracted many tourists in recent years. This has led to the management of religious spaces through the charging of entry fees and zoning. The aim of this study is to clarify the impact of the management of religious spaces on traditional rituals and beliefs. By comparing cases in Okinawa and elsewhere, it was observed that (1) the introduction of economic space management has encouraged the formation of 'secular' management organisations, and (2) the new management organisations are replacing communities that have declined due to depopulation and are becoming the actors responsible for the management of sacred sites. It became clear that this new system of management organisations at the intersection of the secular and religious overlaps with the needs of current tourists seeking spirituality and religiosity.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：地域開発 空間管理 入場料 聖地 ゾーニング

1. 研究開始当初の背景

聖地や集落といった日常のなかで育まれてきた空間の観光地化に伴い、伝統的な宗教性や住環境の維持が課題となっている。その傾向は世界遺産や重伝建(重要伝統的建築物群保存地区)などの文化遺産・文化財政策とともに強まり、日本においても、景観維持活動や入場料(入域料)導入などの手法を通じた住民・行政による空間管理が拡大している。

聖地や生活空間、自然空間など、本来は観光資源ではなかった空間が観光消費の対象になっていく状況に対して、観光学・観光研究では建築学・都市計画・造園学などの「計画」分野からの取り組みが多く、空間管理の制度設計や改善について研究がなされてきた。他方、文化人類学、地理学、社会学などの人文社会科学的な観光学・観光研究では、空間管理は統治権力の浸透やそれによる排除、また空間的な分断と捉えられる傾向が強く、とりわけグローバルに展開する新自由主義的開発により引き起こされるジェントリフィケーションは、都市空間の観光化に伴う負の側面と認識されてきた。このように空間管理に着目した聖地・生活領域の観光的な研究においては、その善悪を前提とした規範的議論が多く見られる一方、入場料導入などの有料化や、修景や路地の浄化、入域者の限定といった空間管理が、地域社会や当事者の生活、また信仰や民俗など価値体系に及ぼすかという、民族誌的な実態把握を元にした研究に関しては、未だ空白地帯であった。本研究では、「宗教と観光」の融合と対立が同時進行する状況を捉えるには、聖地環境の維持に資する制度・管理組織・伝統の流用等を把握した上で、聖地において観光客の物理的なアクセスを制限したり、環境保護を促したりする具体的な仕組みを民族誌的に研究する必要があるとの問題意識を持つに至った。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究は観光地化された聖地を公共空間の一種と捉え、その経済的管理の手法を明らかにするとともに、それが地域社会にもたらす影響評価を民族誌的手法によって行うことを目的とする。聖地や生活空間に世俗的な組織が携わり、宗教性や日常性以外の観点で場所の価値がなされるようになる状況は、従来の宗教研究の観点に加え、地域計画や住民参加型開発を研究してきた観光学の観点を融合させることで研究の視点を整えることが必要となる。このような視点から、本研究では入場料金の導入など「聖地の有料化」や駐車場管理、有給職員の管理など、経済的・制度的な管理の仕組みの導入が在地の生業構造や社会関係にもたらす影響、信仰や民俗(儀礼)など価値体系に対する影響を精査する。それを通して、公共性に資する空間管理、すなわち最大多数の地域住民や観光客にとって受入可能な観光地管理のあり方を明らかにする。

3. 研究の方法

研究目的を達成するため、本研究では沖縄県南城市の聖地・斎場御嶽や久高島における入場料導入の過程や聖域保護の実践、また組織運営や行政との関わりなどに関し、民族誌的なフィールドワークを実施した。同市では斎場御嶽の世界遺産登録(2000年)や久高島への観光客増に伴い、聖域の管理という課題が立ち上がり、そこで入場料は環境維持のための重要な原資として利用されるだけでなく、観光客の急激な増加をコントロールする手段としての側面も持っている。そこで本研究は聖域の管理にあたる地元住民、観光客に対して経済的な空間管理の影響をインタビュー等によって把握し、また行政・NPO・観光客の多様な主体が聖域に対していかなる意味づけを行い、それぞれの主体の組織的目的に応じた関わり方を行う過程を、参与観察によって明らかにした。

次に比較事例として、新潟県佐渡市・宿根木集落における「入域料」(町並み保存への協力金)の導入や管理の実践について調査を行った。同集落では1993年に生活空間全域が重伝建に指定され、かつ2010年代以降、町並みを目的とした観光客が急増し、小集落に年間数十万人が訪れるようになった。景観の護持や観光客への対応が住民それぞれに課せられる状況において、この状況に対処する住民の組織化とその活動状況、生活空間の全域的観光化に対する住民の意識や行動変化、入域料に代表される経済的価値の発生と在地の生業に及ぼした影響について、フィールドワークを元にしたデータ収集とその分析を行った。

以上のフィールドワークに基づくデータを、自然空間の保護に関する生態学的研究や公共空間論、観光地計画論などの理論的研究と接合される理論的作業を行った。また民俗学、村落社会学など広くコミュニティに関わる研究において、工場進出や道路建設など大規模開発に伴う土地収用や生業構造転換に関する研究をレビューし、本課題との比較検討を行った。

4. 研究成果

民族誌的なデータ収集やその分析に基づく研究成果の中心的な論点をまとめると以下のように

なる。

はじめに、聖地や生活空間における経済的空間管理導入のプロセスや、料金徴収の手法、経済的価値の発生に伴う影響について民族誌的調査に基づく分析を行った。斎場御嶽の事例を中心に、宿根木集落、また長崎のキリスト教会群の事例を比較研究する中で、聖地や宗教的な施設において入場料に相当する料金徴収の導入は、増加する観光客に環境維持の経費負担・意識啓発を促すことに目的があると同時に、管理組織の運営経費確保を同時に創出する手段である。同時にそれは、徴収される料金が何の「対価」であるのかという問いを観光客側に生み出すことにもつながり、「消費者」的な関わりを生み出すことにもなる。宗教的な施設や聖地を「消費者」として訪問する人々の増加は、信仰への理解や文化財保護の意識が薄れるリスクをはらんでいる。それに対応するため、管理組織は観光客に宗教的伝統の知識伝達や儀礼作法の教授に努めている。経済的な空間管理は、このように「聖地の消費」を最小化する取り組みと同時並行で行うことが重要であると認識されていることが明らかとなった。

また斎場御嶽や奈留島（長崎県）の事例分析からは、近年、観光客が積極的に宗教的伝統への敬意や信仰心を表現したいという意識が高まっていることも窺えた。このようなケースにおいては、「賽銭」や「献金」のような形で観光客が自発的に金銭を聖地に供える様子が垣間見られ、管理組織が求めるフォーマルな「入場料」とは別の意味づけによるインフォーマルな金銭の動きが認められる。言いかえると、観光客は場所の宗教性への敬意や信仰心を表す方法を求めており、聖地の経済的管理においては、そのような期待に応じうる仕組みを構築できれば、観光客の増加と場所の宗教性の維持が同時に達成できる可能性があると言える。

次に、空間管理の導入に伴う組織化、および複数の関係主体の利害調整や政教分離について検討を行った。入場料を徴収したり、またその収益の用途を検討したりするには従来の共同体を主体とした聖地の管理に代わり、より目的合理的な管理組織の組織化が行われることが多い。こうした組織はNPOや観光協会、ガイド団体などの形態を取り、文化財保護や観光振興、まちづくりなどを目的とし、必ずしも儀礼や信仰の遂行を目的とするのではない「世俗的」な組織であることが多い。だが「世俗的」な組織であっても、過疎により従来の共同体による運営が困難になっている地域においては、事実上このような世俗的な組織が「宗教組織」のようなものとして関わっている。久高島や沖縄本島における調査からは、このように、世俗／宗教という二分法を越えたところで現代の聖地は存在していることが明らかとなった。

加えて、近年は地域振興の観点から行政（地方自治体）が積極的に聖地における儀礼存続や知名度向上に関与するようになってきているが、行政は聖地をあくまで「文化財（文化遺産）」と見なすことで、信仰や宗教性にまでは踏み込まないよう注意を払い、政教分離の原則を守ろうとしていることが窺える。聖地の運営に携わるこうした「世俗的な宗教組織」の拡大からは、それぞれの組織が自己の性格や目的に依拠しながら協働の形を調整していることが明らかとなった。

研究期間中、民族誌的なデータの記述に基づく刊行物を18件、文化人類学、宗教学など、国内外の学会等における口頭報告を8件、研究成果として公表した。研究期間の前半においてはモノグラフや事例分析を中心とした実証的な研究成果が多く、後半においては実証的研究成果をベースにした理論的な考察や分担執筆の比重が大きくなった。観光学においては従来、巡礼や聖地の研究に大きな関心が払われながらも、宗教研究の知見を踏まえた理論化が十分になされていたとは言いがたく、宗教的事象への表層的な理解に基づく理論書や概論書が大勢を占めていた。こうした現状に対し、宗教的事象の内在的理解を踏まえ、宗教研究の視点と観光研究の蓄積とを融合した本研究課題の成果は、今後宗教的空間や村落空間に学術的関心を更に拡大させることが予想される観光学において、基礎研究としての知見を提供するものになったと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 306
2. 論文標題 「あしもとの歴史」から考える共有の民俗学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 門田岳久	4. 巻 23
2. 論文標題 虚構のボーダーレス パンデミック下の国境管理と日常に関するオートエスノグラフィー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立教大学観光学部紀要	6. 最初と最後の頁 38-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 門田岳久	4. 巻 128
2. 論文標題 「粹」を出る現代の観光 「おもてなし」の呪縛を超えるために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域文化（公益財団法人八十二文化財団）	6. 最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 門田岳久	4. 巻 79-6
2. 論文標題 近代のモビリティと巡礼団	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 運輸と経済	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久・石野隆美	4. 巻 21
2. 論文標題 宗教空間の経済的管理に関する基礎研究：聖地における料金徴収の民族誌的データから	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学観光学部紀要	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 92
2. 論文標題 久高島における巡礼ツーリストとヴァナキュラーな宗教性（パネル発表・現代世界における「宗教性」の変容）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 90-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 門田岳久	4. 巻 3
2. 論文標題 四国遍路の後背地： 周辺 から見る大師信仰と巡礼ツーリズム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 四国遍路と世界の巡礼	6. 最初と最後の頁 47-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 門田岳久
2. 発表標題 貨幣と礼拝 鑑賞的聖地における入場料と賽銭の あいだ
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 門田岳久
2. 発表標題 佐渡の霊場と 聖地 の発見
3. 学会等名 新潟大学・佐渡市教育委員会連携事業 シンポジウム「近現代の佐渡と『歴史の場』」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 門田岳久
2. 発表標題 久高島における巡礼ツーリストとヴァナキュラーな宗教性
3. 学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 門田岳久
2. 発表標題 神々の過疎化：『久高島総合計画』にみる聖地と行政支援のゆくえ
3. 学会等名 宗教とツーリズム研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 門田 岳久
2. 発表標題 聖地のプライベート化：場所の商品化と 信仰 のゆくえ
3. 学会等名 第163回 東北人類学談話会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 門田 岳久
2. 発表標題 地域開発の中の聖地：沖縄における御嶽経営をめぐる組織内競合とその帰結
3. 学会等名 「宗教と社会」学会第25回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 門田 岳久
2. 発表標題 四国遍路の後背地 周辺 から見る大師信仰と巡礼ツーリズム
3. 学会等名 愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター春季公開講演会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり・法橋量・島村恭則・フェルトキャンプ、エルメル・周星・山泰幸・重信幸彦・室井康成・加賀谷真梨・金子祥之・辻本侑生・松田睦彦・朴承賢・施暁・鈴木洋平・飯倉義之・依木悟	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 271 (85-96)
3. 書名 『民俗学の思考法 いま・ここ の日常と文化を捉える』（「何も信じられないことがない時代の宗教性信仰と実践」(門田岳久))	

1. 著者名 長谷千代子・田中雅一・矢野秀武・川口幸大・藤野陽平・別所裕介・施 光恒・門田岳久・藤本透子・神原ゆうこ・西村 明・河西瑛里子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 420 (322-350)
3. 書名 『宗教性的人类学 近代の果てに、人は何を願うのか』（「ヴァナキュラー・スピリチュアリティ 沖縄における聖地経験と 地域 のあいだ」(門田岳久))	

1. 著者名 岡本亮輔・鈴木涼太郎・大道晴香・問芝志保・村上 晶・平山 昇・卯田卓矢・天田顕徳・山中 弘・今井信治・門田岳久・畔上直樹・外川昌彦・安田 慎・河西瑛里子・別所裕介	4. 発行年 2020年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 384 (229-248)
3. 書名 『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』（「神々の過疎化 地域開発のなかの聖地と政教分離」（門田岳久））	

1. 著者名 西川克之・石黒侑介・岡本亮輔・鈴木涼太郎・麻生美希・越智正樹・波多野想・金成ミン・門田岳久・奈良雅史・渡部瑞希・村上大輔・田中孝枝・大野哲也・富永京子・越智郁乃	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 348
3. 書名 フィールドから読み解く観光文化学 「体験」を「研究」にする16章（関係性としての地域開発 佐渡の集落に見る伝統・街並み・再帰性（門田岳久））	

1. 著者名 Kadota Takehisa, Johannes Moser, Shimamua Takanori, Silke Goettsch-Elten, Nakao Katsumi, Oguma Makoto, Suga Yutaka, Markus Tauschek, Matsuo Koichi, Yoshitani Hiroya, Kawamatsu Akari, Koizumi Yurika, Tanioka Yuka, Masaoka Nobuhiro, Reinhard Johler, Jan Hinrichsen, Sandro Ratt, Okada Hiroki, Walter Leimgruber	4. 発行年 2018年
2. 出版社 WAXMANN	5. 総ページ数 416
3. 書名 Themen und Tendenzen der deutschen und japanischen Volkskunde im Austausch	

1. 著者名 飯田 卓・門田岳久・河合洋尚・小谷竜介・齋藤玲子・塩路有子・関 雄二・竹中宏子・中村 亮・野林厚志・橋本裕之・吉田憲司・吉田ゆか子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 376
3. 書名 文明史のなかの文化遺産	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------